

私立大学図書館協会  
国際図書館協力委員会  
委員長 金 東澄 様

長崎外国語大学  
教育研究メディアセンター  
マルチメディアライブラリー  
羽田 有花

## 2013 年度 私立大学図書館協会 海外認定研修報告書

### 1. 調査期間

2013 年 8 月 10 日～2013 年 8 月 18 日 (9 日間)

### 2. 調査のテーマ

英国の“古き良き”を活かす図書館の取り組み

### 3. 訪問先

(1) Saffron Walden 郊外 Arkesden の公衆電話ボックス図書館

(2) Saffron Walden Town Library

(3) Cambridge University Library と同大学内の二つのカレッジ図書館

### 4. 調査目的

公共図書館数が激減している英国にて、機能の異なる図書館を調査し、資料のデジタル化や伝統的な図書館文化の淘汰が進む状況の中、現地ではどのような取り組みがなされているかを知ること。さらに、それらの図書館で行われている取り組みや工夫を、自分の勤める図書館でどのように活かすことができるかまで結びつけることを目的とする。

### はじめに

#### 英国の図書館をめぐる事情

図書館を取り巻く環境は、世界規模で目まぐるしく変化している。電子ジャーナルや e-books の購入・貸出サービスの増加、機関リポジトリの普及、それに伴う資料のオープンアクセス化への取り組みなど、紙媒体ではない「資料」を扱う機会が近年、格段と増えている。個人のレベルにおいても、Kindle や iPad を介した電子ブックが普及し、Amazon 等のオンライン図書購入の利便性が向上するなど、紙の資料を主体にサービスを行って来た伝統的な図書館の在り方自体が問われる時代を迎えた。

こうしたデジタル化の波が押し寄せる中、英国では 2013 年 9 月、約 1 億 8900 万ポンドをかけて改築されたバーミンガム公共図書館のオープンが話題となっていたが<sup>1</sup>、その一方で、

---

<sup>1</sup> Library of Birmingham: Official Opening of £189m building  
<<http://www.bbc.co.uk/news/uk-england-birmingham-23934792>>

利用者の激減と財政難を理由として公共図書館の閉鎖・遠隔地サービス停止の件数が著しく増加し、深刻な問題となっている<sup>2</sup>。日本の文部科学省にあたる、英国の政府機関 Department for Culture, Media & Science (DCMS)の2012年の報告によると、英国国内には3300以上の公共図書館が存在しているが、2011年から2012年にかけて201の公共図書館が閉鎖され、2013年の閉鎖館数は74に留まっているものの、2016年までにさらに400の図書館が閉鎖に追い込まれると予想されている<sup>3</sup>。これが現実のものとなると、2009年からの閉鎖された図書館の総数は1000を越えることになる。Chartered Institute of Public Finance and Accountancy(CIPFA)の調査によると、図書館利用者数も2010年から2012年にかけて2.3%減少しており、2006年からの総計で6.7%減少している<sup>4</sup>。図書館存続の危機が騒がれる中、現地の図書館はどのような取り組みをしているのか興味を持ち、英国在住の友人を訪ねる機会を利用して実際に図書館を見学したいと考えた。

友人の協力もあり、英国東部の異なった機能を持つ図書館の訪問と、そこで働く図書館司書の方々にお話を聞く機会を得ることが出来た。訪問したのは、EssexのSaffron Walden 郊外のArkesdenの公衆電話ボックスを利用した図書館、Saffron Waldenの町の図書館、Cambridge University Libraryと同大学内の二つのカレッジ図書館である。

この報告では、新しいものを常に取り入れるだけではなく、図書館サービスの基本である紙の資料や、図書館司書による利用者サービスなど「古き良き」伝統的な図書館の在り方を継承し、それらをうまく活かす図書館ならではの特色や活動に焦点を当て、一つずつ紹介したいと思う。

## 1. Arkesden 公衆電話ボックスの小さな図書館

英国では、2008年頃から英国のシンボルの一つともいわれる赤い公衆電話が、電話以外の用途で活用されるようになっていく。その用途のうち、最もポピュラーなのが、「図書館」としての利用である。公共図書館の予算削減が著しい英国では、2016年までにさらに公共図書館の運営母体である各地方自治体への10%の予算削減が予想されており、2011年だけでも30以上の遠隔地サービスが終了を余儀なくされ、地方住民から非難の声が強まっている<sup>5</sup>。このような中、図書館サービスが停止した地域での図書館の代替として登場したのが、この電話ボックス図書館である。携帯電話等の普及により、サービス提供会社であるBritish Telecom (以下BT)が、採算のとれない英国国内の電話を次々に撤去、過去10年間で33,000台以上の公衆電話が英国から姿を消している中、同社が2009年より'Adopt a Kiosk'というプ

---

<sup>2</sup> Library closure threats spark campaigns across England  
<<http://www.bbc.co.uk/news/uk-england-12239388>>

<sup>3</sup> DCMS Report under the Public Libraries and Museums Act 1964 for 2012/2013 Public Libraries  
<<https://www.gov.uk/government/publications/report-under-the-public-libraries-and-museums-act-1964-for-201213>>, および Chartered Institute of Public Finance and Accountancy(CIPFA)調査による。  
<<http://www.theguardian.com/books/2013/jul/12/library-campaigners-1000-closures-2016>>

<sup>4</sup> CIPFA 調査による(注3参照。)

<sup>5</sup> Library campaigners predict 1,000 closures by 2016  
<<http://www.theguardian.com/books/2013/jul/12/library-campaigners-1000-closures-2016>>

プロジェクトを立ち上げ、地方自治体に1ポンドで買い取りを依頼し、廃棄に追い込まれている公衆電話ボックスを再利用させる試みが行われている<sup>6</sup>。景観維持のためだけでなく、アートギャラリーや図書館の代替として利用するなど、使い方は自由であるが、図書館サービスが縮小されていく中、特に図書館としての役割を担う電話ボックスが多いようである<sup>7</sup>。



(写真1) Saffron Walden 郊外の村 Arkesden

(写真2)の電話ボックス図書館は Saffron Walden 郊外の Arkesden で見かけたものだが、Saffron Walden の別の地区の電話ボックス(写真3)と比較すると、両者の違いは一目瞭然である。



(写真2) Arkesden の電話ボックス図書館



(写真3) Saffron Walden の別の村の電話ボックス

Arkesden の電話ボックス図書館に置かれているのは Kate Mosse の *Labyrinth* 等、そのほとんどが小説や自伝などの読み物で(写真5)、古本として村の人々が寄付したものが多い。疑問に思ったのが、自動貸出機も何もない無人の電話ボックスで、どのように蔵書を維持す

<sup>6</sup> Adopt a Kiosk BT.com <[http://www.payphones.bt.com/adopt\\_a\\_kiosk/HTML/payphone/](http://www.payphones.bt.com/adopt_a_kiosk/HTML/payphone/)>, [www.redphonebox.info](http://www.redphonebox.info) <<http://www.redphonebox.info/history.html>>

<sup>7</sup> Phone boxes: Do we really need them?<<http://www.bbc.co.uk/news/business-22861389>>

るのかという点であったが、この電話ボックスを見せてくれた友人に尋ねたところ、電話ボックスを図書スペースとして利用しているほとんどの地域では、1冊持ちだす際は、1冊置いていく、または必ず借りた本を返却するというルールを設けて運営しているということである。管理は近隣の住民や地域の読書クラブに任せていることが多く、運用の成果については地域差があるようだが、Arkesden では、本との偶然の出会いや、人から人へと渡されていくことで培われる、ある種の「連帯感」と本に対する「親近感」を生む場として機能しているように感じた。



(写真4) 「本を床に置かないで」の注意書き



(写真5) 電話ボックス内の本棚

この取り組みは、North Yorkshire や、Essex 内の他の地域でも行われており、BBC 等でも何度も報道され話題となっている<sup>8</sup>。英国から消えつつある「英国文化のシンボルの一つ」として、現地の人々が大切にしている赤い電話ボックスを利用し、敢えて図書館サービスを復活させるところに、英国人の皮肉なユーモアがあるように感じた。図書館の閉鎖に比例して、このようなサービスが増えて行くことは、「図書館」の価値を裏付ける一つの証拠として考えることができるであろうし、そのままでは価値が見出せないものでも、使い方によっては新たに生命を吹き返すことが可能である、ということを実感した。以上のような点から、消え行く伝統的な電話ボックスと、それを利用した図書館の新しいかたちは、長きにわたって人々に親しまれて来た「古き良き」を二重に活かしたまさに好例であると言えるであろう。

## 2. The Town Library と The County Library – Saffron Walden の公共図書館

“microcosm of the world’s great libraries”<sup>9</sup>

—Peter Searby

サフランの花 “Saffron” とサクソン語でブリトン人の谷 “Walden” の名を持つ Saffron Walden<sup>10</sup>は London から約1時間の距離にあるイングランド東部 Essex にある町のひとつで、

<sup>8</sup> BBC News では、その他の地域として Cornwall や Somerset についても過去に取り上げている。

<sup>9</sup> Searby, Peter. *Saffron Walden Town Library*. Saffron Walden Library Society, 2004, p.24

<sup>10</sup> Britain Express <<http://www.britainexpress.com/counties/essex/az/saffron-walden.htm>>

古くは羊毛産業や、その名が表すようにサフランを使った産業で栄えた場所として知られている<sup>11</sup>。ローマ時代の城壁や中世の街並みが昔のまま残された場所でもあり、”A Medieval Market Town Full of History” (歴史ある中世のマーケットタウン)として現在では観光業にも力を入れている<sup>12</sup>。この町の中心に位置するマーケット広場に静かに佇む図書館は、外観からは図書館とはおよそ予想もつかないような、トスカーナ式様式が印象的なヴィクトリア朝の建物である。



(写真6) Saffron Walden Town Library 正面玄関

## 2.1 二つの図書館 Essex County Library と Saffron Walden Town Library

Saffron Walden の図書館は、一般的なイギリスの公共図書館とは異なり、二つの異なる図書館が一つに統合されたユニークな図書館である。建物自体も、元は二つであった建物を一つにして現在の形となっている。前述したトスカーナ式の建物は、この二つの図書館の正面玄関で、以前は The Corn Exchange (ヴィクトリア朝時代の穀物交換所)であった建物である。イギリスでは一般的に地方自治体が公共図書館の管理・運営をしているが、この建物内でも現在では Essex County Library が一般利用者向けの図書館サービスを請け負っている<sup>13</sup>。写真からは見ることが出来ないが、この白い壁の建物の裏側にあり、現在一つに連結されている部分が 19 世紀初頭に設立された元々の Saffron Walden Town Library(以下 Town Library)で、現在では Victorian Studies Centre とも呼ばれている。この Town Library の建物内は 19 世紀当時の内装がそのまま活かされており、閲覧室に一步足を踏み入ると、19 世紀にタイムスリップしたかと錯覚するほど、隣の Essex County Library とは雰囲気異なっている。建物の保存状態もかなり良く、多くの郷土史研究者やヴィクトリア朝関連の資料が必要な人々が調査に訪れている。私が調査に訪れた日も、早朝にもかかわらず既に数名の利用者が熱心に資料を読んでいる姿がみられた。

## 2.2 Town Library の歴史と現在に至るまで

Saffron Walden Town Library の歴史は古く、1832 年の Saffron Walden Literary and Scientific Institution(以下 SWLSI) 設立までさかのぼる。元々は町の紳士たちが「有益で科学的な知識の普及とその促進」を掲げて立ち上げた組織で、後に、当時、町の名士であった Gibson 一

<sup>11</sup> Saffron Walden Official Guide and Map. Local Authority Publishing,2013,pp.10-11

<sup>12</sup> Essex Tourist Guide <[http://www.essextouristguide.com/Visit\\_Saffron\\_Walden.asp](http://www.essextouristguide.com/Visit_Saffron_Walden.asp)>

<sup>13</sup> イギリスの公共図書館制度については、<http://www.politics.co.uk/reference/public-libraries>, アリステア・ブラッド『新・イギリス公共図書館史』日外アソシエーツ,2011 を参照。

族が中心となり、積極的な教育と学術的研究の普及が行われた。最も貢献したとされる George Stacey Gibson が博物学に造詣が深かったこともあり、19世紀当時の博物学関連の貴重資料を多く保存している。英国東部では Cambridge University Library 以外の図書館の中で、博物学の最も重要なコレクションを所蔵しているとして定評がある。George Gibson が購読を開始した学術雑誌の *the Botanical Magazine* や、1840年に出版された *The Aurelian, a Natural History of English Moths and Butterflies* の第4版、John Blackwall による1860年出版の *A History of the Spiders of Great Britain and Ireland* 等がコレクションの一部に収められているということである<sup>14</sup>。案内してくれた司書の方に蔵書数について尋ねたところ、長年の資料収集と一族の遺産贈与や寄付等により、現在、多くのヴィクトリア朝時代の貴重書を所蔵し、その数は25,000冊を超えるという。

Town Library として単独で運営されていたのは1967年までで、3年後の1970年に Essex County Library が Town Library の隣の The Corn Exchange の建物の中に移転してから、現在の図書館のかたちに至る。Town Library の運営は1982年に創始された The Town Library Society が主に請け負っており、資金援助や所蔵資料の管理、コレクションに関連した講演やセミナー等を行っている。この The Town Library Society は Town Library 設立当初の SWLSI の伝統を受け継いでおり、さらに、The Town Library Society のメンバーだけでなく、County Library の職員も日々利用者への案内や資料保存に関するサポートに関わっているという。企画展示や催し物を行う時は、二つの図書館が連携することも多くあり、2003年には the Heritage Lottery Fund と the Pilgrim Trust からの支援を受け、Town Library 所蔵資料の Essex County Library オンライン・カタログへの登録作業が行われている。そのため現在では、County Library の検索システム ELAN から検索が可能となっている<sup>15</sup>。



(写真7) Town Library の室内①



(写真8)Town Library の室内②

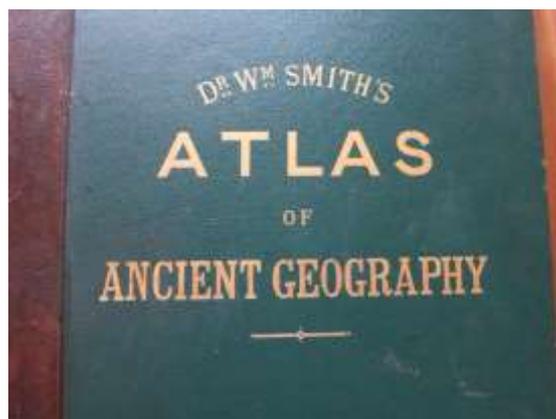
当時の書架や家具をそのまま利用している。

<sup>14</sup> Searby, Peter. *Saffron Walden Town Library*. p.11

<sup>15</sup> Saffron Walden Town Library <<http://www.townlib.org.uk/catalogue.htm>>  
ELAN Catalogue <<http://elan-classic.essexcc.gov.uk/>>



(写真 9) Essex 関連の資料には州章の目印が付けてある。



(写真 10) 保存資料の一例で、世界地図の変遷をみる事が出来る *Atlas of Ancient Geography*

Town Library としての独立した機能は失ったが、Essex County Library との差異を出すために、Town Library はヴィクトリア朝の資料の専門図書館としての地位を確立させた。ヴィクトリア朝時代から受け継がれた資料を保存するだけでなく、現在出版されている同時代の関連資料の補充や、Essex 内の図書館で除籍対象となったヴィクトリア朝関連資料を再受入し、コレクションとしての完成度を高めるなど、Victorian Studies Centre として図書館機能を最大限に活かす工夫がなされている。公共図書館を訪れる一般利用者のニーズには合わないが、英国史や 19 世紀関連の文学を専門とする研究者にとっては、数々の貴重書の宝庫とみなされている。一般利用者を制限する大学図書館が多い中、これらの専門を学ぶ人々にとって、誰もが利用できる「公共」の場として専門資料のサービスを行っている Town Library は、ひらかれた「知」を提供する存在であるように感じた。

### 2.3 The Essex County Library

一方、The Corn Exchange の建物を使った County Library の部分は、一見どこにでもある図書館のようだが、現代的な内装の中でも、細かい部分に町の伝統を活かした工夫が見られた(写真 11,12)。一般図書の配架も、(写真 13,14)のように、誰もが一目でわかる分類となっており、利用者にやさしい図書館という印象を受けた。



(写真 11) サフロンの花や州のマークをあしらった踊り場



(写真 12) 町のシンボルであるクモの巣状の窓をイメージした天窓



(写真 13)ジャンル別に分けられた書架



(写真 14)一般の利用者にもジャンルや内容が一目でわかるよう、ステッカーで分類してある。



(写真 15)2階から眺めた館内。開放的な雰囲気である。

Essex County Library のスタッフは、私の突然の訪問にも関わらず、e-books の貸借サービスや、オンラインでの州内横断検索システム、遠隔地サービスについても画面を使って説明をしてくれた。さまざまな図書館サービスが縮小されていく中、残された図書館がいかに良いサービスを出せるかが、図書館が未来に生き残るための鍵であるということ話をしてくれた。また、積極的に取り組んでいる活動として挙げられたのが、地方図書館には不可欠な地域との連携であった。滞在中、町内では Maze Festival という Saffron Walden に存在した Turf Maze に関連するフェスティバルが開催されていたため、図書館内でもイベントに合わせた特別展示やおはなし会が企画され(写真 16)、地域活性化に積極的に取り組む姿が見られた<sup>16</sup>。イベントに限らず、救命処置の一般向け無料講座が開かれるなど、生活に密着した行事やセミナーも度々行われている(写真 17,19)。コミュニティの中心的存在であり、人々にとって「頼りになる」図書館として機能しているようであった。

Saffron Walden の図書館は Town Library と Essex County Library という二つの旧新の組織が互いに役割分担し、さまざまなイベントや資料収集を協力して行うなど共存をはかっている。資料をある専門に特化させて特徴を持たせたり、積極的に地域との連携を図るなど、利用者のニーズに合わせるだけでなく、新たにニーズをつくり出しているという点が非常に印象的であった。古いものを大切に、伝統的な図書館の雰囲気を残しつつも、閉鎖的な空間となることなく、地域の人々の拠り所となる図書館として開かれている理想的な図書館であ

<sup>16</sup> <http://www.labyrinthos.net/turflabuk.html>, McCullough, David D. *The Unending Mystery: A Journey through Labyrinths and Mazes*. Anchor, 2005 を参照。

るように感じた。



(写真 16) Maze Festival 等、地域に関連する資料の展示。 (写真 17) 地域住民による展示。



(写真 18) 利用者でにぎわうカウンター。

(写真 19) 地域住民に向けた CPR 訓練の様子。

### 3. Cambridge University Library と二つの College Libraries

Saffron Walden から 12 マイルほど離れた University of Cambridge は、31 のカレッジと 150 の学部学科等の施設からなり、18,000 人以上の学生を抱える、誰もが知る名門大学である。世界各国から集まった学生はそれぞれ入学時に決められたカレッジに属し、そこで寮生活をしながら専門科目を学ぶ。それぞれのカレッジには専用の図書館があり、いつでも学習できる環境が整えられている。さらにそれぞれの学部図書館と、それらを統括する中央図書館という 3 つの異なる規模と機能を持つ図書館が存在する。大学自体が一つの町のように、カレッジの図書館が町村立や学校図書館、学部図書館が市立図書館、中央図書館が県立図書館というように、規模と機能がちょうどあてはまるように感じた。今回、二つのカレッジの図書館である Christ's College Library、Trinity College Library、その内部にある Wren Library、中央館にあたる Cambridge University Library を主に見学することができた。



(写真 20) University of Cambridge の College の一つ  
Christ's College の外観。



(写真 21) Christ's College の Old Library

訪問時は企画展示が催されていた。



(写真 22) Christ's College の一般書架

主に一般教養に関する資料が豊富に揃えてある。



(写真 23) 常に学習できる環境が整えてある。

### 3.1. Christ's College Library 学生の居住空間にある図書館

はじめに訪問した Christ's College Library は 1505 年から続いている図書館で、500 年以上の歴史を誇る。現在は、古くから引き継がれてきた 25,000 冊を超える貴重図書を所蔵するエリア(通称 Old Library)と、通常、学生が利用するリーディング・ルーム(通称 Working Library)とに主に分かれている。

この Christ's College Library に勤務する Charlotte Byrne 氏が案内を引き受けてくれた。訪問時、Working Library 内は新学期に向けて書架整理中で、至るところに資料が置かれてあったが(写真 22, 23)、Byrne 氏によると、多くの本を学生に利用してもらえるように整理中もほとんど開館しているということであった。この Working Library の資料は、主に日本の教養教育にあたる学部 1～2 年生用向けの図書がほとんどであり、専門資料については各学部図書館を利用するように指導しているということであった。新入生向けのライブラリツアーも行われているそうで、ツアーに参加して初めて図書館の利用許可が与えられる仕組みに

なっているという。ツアー参加を必須にしている点は非常に面白いと感じた<sup>17</sup>。

通常、Working Library は 24 時間開館しており、スタッフが対応するカウンターのほかに、自動貸出用の端末も設置してある。スペースがあまり広くないこの図書館は、自習室により近いような感じを受けたが、この Christ's College の素晴らしいところは、古い資料を保存する Old Library との併設である。一歩 Old Library の方に足を踏み入れると、全く違う空気が漂っており、知的好奇心をくすぐる、古くも美しい書架が出迎えてくれる。訪問した際には、"Past Masters: An Exhibition Celebrating Five Centuries of Leadership at Christ College, Cambridge" という歴代校長に関する展示が開催されていた。各人物に関連する資料や映像を使っており、単に資料を保存するだけではなく、貴重書を展示する機会を作りながら、学生の学習意欲や興味を刺激する工夫がなされていた。

資料の保存について Byrne 氏に尋ねると、埃やカビによる傷みに頭を悩ませていると嘆いていた。「図書館で湿気が多い土地であれば常に付きまとう問題。もっと湿度が高い日本も大変でしょう。ここでは、専門のブック・クリーニングや修理業者への依頼が出来るからまだ安心できるけれど、油断の隙もない。どこの図書館でも、同じような問題を抱えているようだ。」と共感してくれた。保存の話題から波及し、「ここにある資料は、書架で眠らせているだけで終わらせてはいけない。もっと多くの人に知ってもらい、利用してもらいたい。そのためには、1 万冊ほど存在するオンライン・カタログへの未登録資料の遡及入力作業をすることが一つの課題。」と所蔵する資料に対する思いを語ってくれた。Christ's College ではオンラインのデータベースや、先に述べた自動貸出機など、最新の設備も整っているが、「紙の本によって積み重ねられた歴史を守り、受け継ぐ」伝統的な図書館の一面を持ち合わせている。古いものを守りつつ、利用に供することを重視している点は、少し意外に感じた。私自身が英国の大学図書館自体に閉鎖的なイメージを持っていたため、たとえ図書館自体は所属する学生や教職員専用であっても、「多くの人に資料を使ってほしい」というひらかれた考え方で日々業務にあたっていることはおよそ想像がつかなかったからである。もちろん、公共図書館のように「ひらかれた場」という機能とは異なっているが、Byrne 氏に話を伺いながら、今後の大学図書館の在り方について改めて考えさせられた。学生が利用しやすい環境を提供しながらも、所蔵する資料を出来るだけ多くの人にも知ってもらい、利用してもらうことが、「知」を発信する高等教育機関としてさらに求められてくるのではないかと感じた。

### 3.2. 多くの偉人を輩出した Trinity College Library と貴重資料

次に訪れたのは、1546 年に英国王ヘンリー八世が設立した Trinity College 内の図書館であるが、College Library の中では最大規模の 300,000 冊の蔵書数を誇る。アイザック・ニュートンを始め、詩人のアルフレッド・テニソン、英国王室チャールズ皇太子も、この College の卒業生として知られている。

Trinity College Library 内にある The Wren Library は、その名の由来となった Sir Christopher Wren がデザインし、1695 年に完成した。この Trinity College においても、先に訪れた Christ's College と同じく、一般の学生向けのリーディング・ルームと古くから存在する The Wren

---

<sup>17</sup> 利用に関する詳細は Christ's College Library 学生向け案内<<https://www.christs.cam.ac.uk/library/overview>>を参照。

Library が併設してある。

どの College Library も College に所属する学生のみが利用できることが原則であるが、The Wren Library は一般利用者の見学を認めている。ここには、主に 1820 年までに出版されたカレッジ内の図書資料が所蔵されている。中世から伝わる写本や、ニュートンのメモ書き、A.A.Milne の *Winnie-the-Pooh* (『クマのプーさん』) の原稿なども展示されており、博物館のような機能を備えた図書館である。しかし、博物館と異なっているのは、この図書館内で現物資料を利用して研究する人々がいる点である。現物を利用する際は、学部や指導教官等からの推薦状と事前の手続きが必要であるが、図書資料という形で保存された「知」が現代に受け継がれていることを直接目にすることができ、図書館が飽くまで図書館として活用されている点が非常に印象的であった。なお、中世の写本等の貴重資料については、デジタル化されており、オンラインでも閲覧が可能である<sup>18</sup>。

資料のデジタル化という新しい技術を取り入れながらも、古い資料を大切にし、バランスを保っている点も大変参考になった。「古き良き」資料の維持や「図書館」という空間の保存と、オンラインを通じた資料提供、現物での資料提供をバランスよく行っており、紙をベースとした伝統的な図書館としての役割を果たしながらも、それだけに留まらず、現物だけでは対処できない部分をデジタル資料で補完する使い方は、デジタルとアナログの参考となる棲み分け方であると感じた。

Assistant Librarian の Ben Taylor 氏に少しだけお話を伺う機会を得たので、このような歴史ある図書館に奉仕する中で、最もやりがいを感じるのはどんな時かと尋ねてみた。すると、「歴史を受け継いでいくこと、そして受け継がれた『知』が、さらに新たな学生に受け継がれる際のサポートをすることである。」と答えてくれた。Taylor 氏の答えから、図書館司書としての「普遍的な使命」—利用者をも目的の「知」まで誘導し、サポートすること—は、国が違っても、規模や機能が異なっても、デジタル化で図書館を取り巻く環境が変化しても変わらないものである、ということ改めて考えることが出来た。



(写真 24:上)Trinity College の敷地内。

(写真 25:左)創始者ヘンリー八世の像で有名な時計塔。

<sup>18</sup> Catalogue Medieval Manuscript <<http://www.trin.cam.ac.uk/index.php?pageid=351>>

### 3.3. Cambridge University Library の”Tower Project”

最後に、Cambridge University Library の中央館を訪れた。Cambridge University Library は、The British Library や University of Oxford の the Bodleian Library と同じく法定納本図書館の役割を果たしている。つまり、18 世紀から英国で出版された図書資料のすべてがこの Cambridge University Library に収められているということになるという。しかし、当時は学術的価値のある図書資料のみが図書目録システム上に登録されていたため、非学術的であると判断された児童書や教科書類は、”B-Stream” と呼ばれ、1930 年頃から図書館の塔部分に収蔵された。この図書館で今回案内をしてくれた司書の Rosalind Esche 氏は、”Tower Project”と呼ばれる、これらの資料の整理と書誌登録の遡及作業に携わっていたため、私が個人的にイギリスやアイルランドの児童文学や昔話など、コレクションに収められているような資料に興味を持っていることを知り、特別に塔内への立ち入りを許可してくれた。

コレクションには”Triumph and disaster: Britain in the 1910s” (1910 年代の英国の栄光と影) というテーマがつけられ、Mellon Foundation と Leverhulme Trust からの援助を受けて”Tower Project”という書誌の遡及入力作業が行われた。このプロジェクトの遡及作業は 2006 年から 2012 年に援助が打ち切られるまで続けられた。

学生の間では、この図書館の塔部分には卑猥本や怪しい類の本が収蔵されていると噂されるなど、誰もが全貌を知らないまま、ほぼ 1 世紀のあいだ眠っていた資料である。Esche 氏も、「確かに、学問とは認められないとして当時開架にされないままとなっていたのは仕方がないが、1 世紀もの間、美しい資料が知られずにいたというのは非常に残念。遡及作業に取りかかることが出来て嬉しかった。」と述べていた。残念ながら、資料保存場所では撮影禁止のため、写真として収めることはできなかったが、いくつかの資料については当時遡及作業を担当していたグループのブログで紹介しており、コレクションの一部を知ることができる<sup>19</sup>。非常に鮮やかな色のカバーの資料が多く、背表紙までイラストが施してあるもの等、思わず目をひく愛らしいものが多かった。Esche 氏も「表紙の美しさは、現代の図書資料とは比べものにならない。本の中身や本体だけではなく、装丁も資料の一部であり、保存することは非常に意味があることだ。」と語ってくれた。資料の中には、Kipling 作の *Jungle Book*、伝説的英雄である Robin Hood の物語といった児童書や、反英国国教会について論じられている宗教書、第一次世界大戦中の描写が載っている時事資料、1910 年代の生活の様子が描かれた冊子など、エドワード朝から第一次世界大戦の時代の流れを知ることが出来る、非常に貴重な図書資料と考えることが出来る。先にも述べたとおり、遡及作業は 2012 年で打ち切りとなってしまい、ここ Cambridge University Library でさえ、英国の財政難の影響下にあることを痛感した。「最終的な整理を行うまでには至らなかった」と Esche 氏も嘆いていたが、一方で「これらの本に価値を見出し、新たに学問として役立たせるためのプロジェクトに関わることが出来て非常に光栄だ。」とも語ってくれた。新しいものばかりを取り入れるのではなく、古いものから価値を再発見し、再度整理をして保存する資料への情熱がうかがわれた。資料の分類については、とくに分類法に拠らず、大きさと年代別に並べられるだけで、それぞれ個別の資料ナンバーだけで検索が可能になるようにしてある。通常、これらのコレクションを利用したい際は、カウンターで手続きを済ませ、

<sup>19</sup> Tower Project blog <<https://towerproject.blog.lib.cam.ac.uk>>

図書館司書がカウンターまで取り寄せるシステムとなっており、利用者の塔内への立ち入りは原則として認めていないということであった。しかし、オンライン・カタログの Newton から検索をすることも可能となっているため、これらの資料が 20 世紀初頭の英国社会研究や児童文学研究に幅広く活用されることが期待されている。

古いものに新たに価値を見出すことに重きを置く図書館としての在り方に非常に感銘を受けた。

おわりに

今回訪問した 3 つの異なる機能を持つ図書館に共通しているのは、図書館の持つ機能は異なっても、「古き良き」図書館としてのサービスや空間、資料を大切にし、既存のものをうまく利用しながらニーズをつくり出す能動的な姿勢であった。図書館は何をしなければならぬのかという視点から、図書館だからこそできることは何かという発想の転換、前向きな態度を、今回の訪問を通して学ぶことができた。淘汰が進む中でも、デジタル資料等の新たな媒体との棲み分け方法を考案したり、工夫して資料収集を行うなど、新しい図書館の在り方と古くからの図書館の在り方のバランスを保ちながら相互協力する姿勢も同じように大切であると感じた。

自分の勤める図書館に、今回の訪問で学んだ点を照らし合わせると、ラーニングコモンズや、オープンアクセス、e-books など、時代を反映させた図書館の在り方ももちろん必要であると思うが、やはり、紙の資料を利用した展示や収書の在り方、利用者サービス等、図書館の伝統的な役割の部分についても再度見直していくことも大切なのではないかと感じた。図書資料は、収集方法や、展示での見せ方などによって、自由にテーマを変えて利用することができるし、収集資料の強化分野を設定して独自性を出す、ターゲットを絞ったイベントの開催等、ちょっとした工夫で新たな本の一面を見せることが出来る。今回の訪問で得たことを自分が勤める大学図書館にどのように活かせるか—長崎の外国語大学だから出来ること、現在所蔵する資料や設備を使ってできること—について再度考え、一人でも多くの学生が足を運んでくれるようなニーズを作り出せる図書館にしたいと考えている。

参考文献一覧

1. アリステア・ブラッド『新イギリス公共図書館史 - 社会的・知的文脈 1850-1914』  
日外アソシエーツ,2011
2. 徳田聖子「英国の図書館における資料保存の一側面」『大学図書館研究』vol.86,2009,  
pp.28-37
3. 呑海さおり「イギリスの図書館ネットワーク：英国図書館・イギリスの大学図書館訪問  
記②イギリスの大学図書館」静脩 vol.36 no.2,1999, pp.6-10
4. 呑海さおり 「英国図書館の未来とイギリスにおける大学図書館の発展 リチャード・ロ  
ーマン氏講演要旨」静脩 vol.36, no.4 , 2000, pp.20-22
5. McCullough, David D. *The Unending Mystery: A Journey through Labyrinths and Mazes*. Anchor,  
2005
6. Searby, Peter. *Saffron Walden Library*. Saffron Walden Library Society, 2004
7. *Saffron Walden Official Guide and Map*. Local Authority Publishing, 2013
8. Cambridge University Library Annual Report for the Year 2012-2013  
<[http://www.lib.cam.ac.uk/About/annual\\_report\\_2012-2013.pdf](http://www.lib.cam.ac.uk/About/annual_report_2012-2013.pdf)>